



19世紀英国の芸術家集団による協働的实践 : 「古代人たち」から「エトラスカンズ」へ

| | |
|-----|---|
| 著者 | 山口 恵里子 |
| 発行年 | 2018 |
| URL | http://hdl.handle.net/2241/00158857 |

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370124

研究課題名(和文) 19世紀英国の芸術家集団による協働的实践 「古代人たち」から「エトラスカンズ」へ

研究課題名(英文) Artistic Brotherhoods in Nineteenth-century England: From the Ancients to the Etruscans

研究代表者

山口 恵里子 (YAMAGUCHI, Eriko)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：20292493

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：19世紀ヨーロッパでは、危機的な社会・政治状況の下で各地に結成された芸術家兄弟団が芸術規範に挑んだ新しい芸術を協働して生み出そうとする動きが見られた。本研究はイギリス19世紀の兄弟団「古代人たち」(1820-30年代)、ラファエル前派兄弟団(1848-50年代)、エトラスカンズ(1860-80年代)を研究対象とし、彼らが協働して制作した「プリミティブ」な絵画及び唯美主義的絵画の共通性と差異、兄弟団が抱えた矛盾、グループ間の繋がりを明らかにし、彼らの集団的な芸術実践のありようを考察した。またイギリスのレディング大学名誉教授J. B. Bullen氏を招聘し、本研究課題に関わる講演会を開催した。

研究成果の概要(英文)：The birth of the artistic brotherhood in the nineteenth-century Europe can be seen as a response to the social and political crises of the age and a challenge to the Academies. This research focuses on three English brotherhoods, the Ancients in the 1820-30s, the Pre-Raphaelite Brotherhood formed in 1848, and the Etruscans in the 1860-80s. They shared the utopian ideal of the brotherhood which was also marked by contradiction. They produced what they called 'primitive-style' works which were reactionary, both in their artistic expression and in their social vision. The three groups linked each other and its link disclosed a new possibility for reconsidering English art history.

I invited J.B. Bullen, Professor Emeritus at the University of Reading, and held his lectures relating to the topic of this research.

研究分野：イギリス美術、イメージ人類学

キーワード：ラファエル前派兄弟団 古代人たち エトラスカンズ 協働的实践 兄弟団 中世主義 プリミティブイズム 唯美主義

1. 研究開始当初の背景

19世紀ヨーロッパでは、政治的、経済的、社会的領域から孤立するようになった芸術家が芸術家集団を結成し、協働して制作することによって、アカデミーが統べる芸術規範に挑み、「新しい」芸術を生み出そうとする動きがみられた。これらの集団は、物質主義を批判して中世の精神性を重視した一方で市場に作品を売るための集団的なアピールを必要としたことや、男性芸術家による兄弟団で「友愛」を訴える一方で女性を排除したことなど、共通する矛盾を抱えていた。そのような芸術家集団の出現は、19世紀という時代が生んだ文化的、芸術的な現象だが、これまで芸術家集団を19世紀特有の現象として捉えた研究はほとんど行われておらず、研究の多くは集団のなかの主たる芸術家の作品制作に焦点を当ててきた。また協働による制作については、アーツ・アンド・クラフツ運動を支えた芸術家やデザイナーの工房に関する研究が進められてきたが、いわゆる「ファイン・アーツ」の芸術家集団の協働的实践については看過されてきた。これは、まさに19世紀の芸術家集団が挑んだ、「芸術」は個々の芸術家が担うものとする「モダニスト」の見方が研究の動向を決めてきたからである。

2. 研究の目的

本研究は、イギリス19世紀に結成された3つの芸術家集団を年代を追ってとりあげ、(1)各集団の協働のあり方、(2)過去(中世)への志向(プリミティヴィズム)とモダニティの関係、(3)友愛が結ぶ関係性について詳細に比較考察し、各集団の協働的实践の背景とその効果、そして矛盾を明らかにする。この考察に基づき、各集団の作品制作を再考するとともに、彼らが追求した「モダニティ」について問う。対象とする集団は、イギリスで最初に結成された芸術家兄弟団の「古代人たち」(1824年頃～37年頃)、1848年にロン

ドンで結成された「ラファエル前派兄弟団」、19世紀後半にローマ在住のイタリア人画家G. コスタの周囲に集まったイギリス人画家による「エトラスカンズ」である。L. モロヴィッツとW. ヴォーンによる編著 *Artistic Brotherhoods in the Nineteenth Century*(2000)は19世紀ヨーロッパの各地で結成された芸術家集団の共通性を重視したが、本研究ではイギリスで結成された3つの芸術家集団を通時的に研究することにより、共通点を探究しつつ、相違も明らかにし、個々の芸術家に焦点を当ててきた美術研究では捉えきれなかったイギリス19世紀の複雑な芸術環境を、社会、政治、経済的視点もふまえて解明する。

3. 研究の方法

(1)「古代人たち」の画家サミュエル・パーマーは、ロンドンを離れてケント州ショールム村に滞在した。ショールムを、「古代人たち」の画家ジョージ・リッチモンドやエドワード・カルヴァートらも訪れ、その肥沃な地を主題にした作品を協働して制作した。本研究では、その制作状況を、彼らの書簡や回想録から明らかにした。また「古代人たち」は結成当初から、中世主義の色彩が濃いウィリアム・ブレイクの作品から強い影響を受けた。ブレイクと彼らの関係を詳らかにし「古代人たち」のアルカイズムを「モダニティ」への敏感な反応として捉え、彼ら独自の「近代」との対峙の仕方を考察した。「古代人たち」の資料は、日本では入手が困難なため、イギリスの大英博物館、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館、ナショナル・アート・ライブラリー、テート・ブリテン、アシュモリアン博物館、フィッツ・ウィリアム博物館等で、素描を含む作品やスケッチブック、文献の調査を行い、現地の研究者と情報交換も行った。

(2)ラファエル前派兄弟団についても上記の

美術館・博物館等にて作品と文献の調査研究を実施するとともに、イギリスの研究者との情報交換を行い、中世主義やプリミティヴ芸術再評価の動きとの関連をふまえて彼らのプリミティヴィズムとモダニティとの関連を再考し、論文としてまとめた。

(3)エトラスカンズは、イギリスとイタリアの画家たちによる国際的な交流から生まれた集団である。彼らの国際的な協働的実践の背景を探究するべく、日本では閲覧できない作品と入手不可能な資料の調査研究を、上記の美術館・博物館において実施した。

(4)以上の調査研究を行いながら、文化的、社会的、政治・経済的な背景と濃密に結ばれた芸術家の協働的実践の研究には、芸術と人類学を接続したイメージ人類学のアプローチが有効であると考え、そのアプローチの可能性を拓ける研究に着手した。

4. 研究成果

本研究により、これまでのイギリス美術研究からは見えてこなかった芸術家の協働的な制作状況が明らかにされ、また芸術家グループ間の関係が浮かび上がってきた。産業革命を経て近代的個人によるアトム化された社会において人々の営みが急変していく中で、芸術家が協働的な実践を拠り所にして、アカデミーに対抗する新しい芸術を生み出していく過程が明らかになった。

(1)まず、研究対象とした兄弟団が作品を制作、展示した19世紀のアートシーンを芸術のみならず文学、建築、ファッション等の多方面から検証し、人の創造行為と場の相互作用を詳らかにした。芸術行為とロンドンという場をつなぐメディアとしてテクノロジーを重視し、20人もの研究者と協働して編んだ論集『ロンドン——アートとテクノロジー』を出版した。山口は、ラファエル前派のロセッティがウィリアム・モリスやパーン＝ジョーンズらと協働して制作した中世風家具を

取り上げ、彼らが中世的ギルドを復活し、ファイン・アーツと装飾芸術を接続したことを論じた。この家具制作は後にアーツ・アンド・クラフツ運動に展開する。

(2)この運動の影響を受けながらインドで美術教育に従事したJ. L. キプリングもラファエル前派と交流をもった。キプリングが教えたインドの芸術学校を、現地の学生との協働の場として捉え、ブライトンの「キープ」でキプリングのアーカイブを調査し、大英帝国の美術教育がインドの伝統と摩擦を起ししながらも、いかにキプリングがインドのクラフツマンシップの保存と展開を重視していたのかについて論じた。

(3)ラファエル前派兄弟団の協働的な芸術実践が目指したモダニティについては、「ラファエル前派兄弟団におけるプリミティヴィズム」と題した論文を執筆した(平成30年度出版予定)。

(4)「古代人たち」の協働については、パーマーが移住したショーラム村における彼らの制作状況を明らかにし、ブレイクとの密接な関係性も探った。プリミティヴなるものへの志向を媒介にした彼らの関係性は、「古代人たち」とラファエル前派、ロセッティ兄弟とを繋いだ。ロセッティ兄弟が出版に尽力したA. ギリクリストの『ブレイク伝』(1863)に、「古代人たち」によるブレイク像が記録されたことにより、「古代人たち」の活動も公に知られることとなった。

(5)パーマーは「古代人たち」の画家G. リッチモンドと1837年ローマに旅立った。彼らのローマ滞在は「エトラスカンズ」に影響を与え、実際リッチモンドの息子ウィリアム・ブレイク・リッチモンドは「エトラスカンズ」の一員となった。「エトラスカンズ」はG. コスタの影響下でセンチメントを表出する風景画を描き、イギリスのモダニズムを誘発した。

(6)平成27年度と29年度にはレディング大

学名誉教授 J. B. Bullen 氏を招聘し、本研究に関わる連続講演会を開催した。平成 27 年度には 11 月 4 日(筑波大学)、11 月 10 日(西南学院大学)、11 月 12 日(同志社大学)に、“The British Art World Turned Upside Down: The Pre-Raphaelite Revolution”と題した講演会を開催した。29 年度には 2 月 16 日に筑波大学で講演会“Aestheticism into Modernism: Transition or Fracture”、2 月 17 日に日本女子大学で“Long Live King Arthur!: British Pre-Raphaelitism and Arthurian Myth”、2 月 19 日に中央大学駿河台記念館で“Hardy’s *Tess of the d’Urbervilles*: Myth, Music and Painting”と題する講演会を開催した。いずれの講演会でも多数の聴衆が Bullen 氏と意見や情報を交換しあうなど、講演会を通して本研究を広く研究者や学生に還元することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

1) 山口恵里子 「「古代人たち」から D. G. ロセッティへ——A. ギルクリスト『ウィリアム・ブレイクの生涯』を媒介として」『論叢現代語・現代文化』(筑波大学)査読有、第 19 号、2018 年、53～86 頁

2) 山口恵里子 「ジョン・ラスキンとイメージの人類学——共感の形象可能性」『ラスキン文庫たより』無査読、73 号、2017 年、1～5 頁

〔図書〕(計 5 件)

1) 田中正之監修、田中正之、デイヴィッド・H・ソルキン、荒川裕子、小野寺玲子、山口恵里子 『イギリス美術叢書 II フィジカルとソーシャル——ウィリアム・ホガースからエプスタインへ』ありな書房、2017 年、218 頁 [山口恵里子「肉をまとう魂——D. G. ロセッティが描いた〈手〉について」107～142、204～210 頁]

2) 田中正之監修、小野寺玲子編集、田中正之、荒川裕子、小野寺玲子、山口恵里子、喜多崎親 『イギリス美術叢書 I ヴィジョンとファンタジー——ジョン・マーティンからバーン＝ジョーンズへ』ありな書房、2016 年、218 頁 [山口恵里子「サミュエル・パーマーのパストラルにおける翳り——夢と影のヴィジョン」115～150、202～207 頁]

3) 江藤秀一編、江藤秀一、山木聖史、竹谷悦子、ティム・バリンジャー、江藤光紀、一谷智子、掘真理子、山口恵里子、清水知子、巽孝之、鈴木章能、仙波豊、朴宣美、向井秀忠、松本三枝子、中田元子、対馬美千子、井石哲也、安藤聡、長岡真吾 『帝国と文化——シェイクスピアからアントニオ・ネグリまで』春風社、2016 年、510 頁 [山口恵里子「ジョン・ロックウッド・キプリングとインドのクラフツマンシップ——未来への記録」189～231 頁]

4) 山口恵里子 編、山口恵里子、大石和欣、荒川裕子、富岡進一、荻野哉、ティム・バリンジャー、アラステア・グリーヴ、菅靖子、松村昌家、松村伸一、小野寺玲子、川端康雄、小野文子、大久保恭子、堀川麗子、眞嶋史叙、金山亮太、中田元子、井上友子、田中みわ子、『ロンドン——アートとテクノロジー』(西洋近代の都市と芸術、第 8 巻)竹林社、2014 年、510 頁 [山口恵里子「序 アートとテクノロジーの織り地——十九世紀ロンドン」7～28 頁、「ラファエル前派の中世風絵付け家具における「無骨な」テクノロジー——デザインとマテリアリティのあいだ」251～285 頁(翻訳：アラステア・グリーヴ「ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ《見よ、われは主のはしためなり！》」148～173 頁)]

5) 乳房文化研究会編、田代眞一、北山晴一、上野千鶴子、武田雅哉、鎌田東二、塚田良道、肥塚隆、山口恵里子、高階絵里加、表智之、蔵琢也、深井晃子、米澤泉^{にゅうぼう} 『乳房の文化論』

淡交社、2014年、326頁 [山口恵里子「乳房に恵まれる——ヨーロッパにおける授乳するマリア像」、149～174頁]

〔その他〕

ホームページ等

1)講演

2016年度秋のラスキン講演会（ラスキン文庫主催）2016年11月12日

山口恵里子「ジョン・ラスキンとイメージの人類学」（中央大学駿河台記念館）

2)事典項目執筆

『イギリス文化事典』（丸善出版、2014年、906頁）に、「ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ」「ウィリアム・モリス」（(342-45頁）「ロンドン・ナショナル・ギャラリー」（354-55頁）「アーツ・アンド・クラフツ運動」（364-65頁）を執筆

3)書評

・ Beatrice Laurent ed., *Sleeping Beauties in Victorian Britain: Cultural, Literary and Artistic Explorations of a Myth* (Bern: Peter Lang, 2015). 『ヴィクトリア朝文化研究』第14号、2016年、141～145頁

・ 佐々井啓 『ヴィクトリアン・ダンディ——オスカー・ワイルドの服飾観と「新しい女」』 『オスカー・ワイルド研究』第14号、2015年、105～109頁

6. 研究組織

(1)研究代表者

山口恵里子 (YAMAGUCHI, Eriko)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：20292493